

臍のゴマの正しい取り方

廣 田 頼 道

25年余り前、何社の新聞で、何という方が書かれていたかは完璧に忘れてしまったが、当然内容から言えば医師の方であろうと想う。25年余りの時間が経過しているのに、妙にこの内容が記憶に残っているので雑話として記しておきたいと思う。

記事の切り取りを残しておいたわけではないので、25年余りの間に私の頭の中で手前勝手に増幅してしまった事を書くかもしれないが、その点は読み手も勝手に割引いて考えて貰いたいと思います。

昔から臍のゴマに触ると腹痛を起こすから触るなと言われています。しかし、何故そうなるかと言えば、臍のゴマは、産まれて臍の緒を括った時に滲んだ血液が、括って絞られ放射状のヒトデ形の溝形状の所に固まって残り、それが核となって、長い年月の垢、汗、埃が、それぞれに混じる油と渾然一体となって、少しずつ少しずつ、調度阿古屋貝の中に人

為的に核を挿入して、その核を手掛かりに真珠が育つように、固く、大きくなって行くにしたがつて皮膚なのかゴマなのか分ち難いほど癒着してしまう為に、古来より、「臍のゴマに触ると腹痛を起こす」という言い伝えが経験的に言われる様になったのであります。

しかし、この言い伝えは事実であり、本当に腹痛を起こしたり、炎症を起こしたり、化膿して、人知れず医者に行かなければならぬ人もいたのであります。本人が実際にゴマに触らなくても、固く大きく増殖してしまつたゴマの方が、下着や不用意な手の動きに引つ掛かつて炎症や化膿を起こすことも度々なのであります。

そこで、昔から言われている様な、臍のゴマに触るのではなく臍のゴマを正しく取ることによつて、臍のゴマの迷信から解放され、炎症、化膿から来る痛みの無い健康な生活をしてもらいたいのであります。

①風呂上がり、小指の第一関節の半分位の大きさの綿に、オリーブオイルを滴り流れない程度の飽和状態に含ませ、臍の中へ入れ、上から綿が出て

こない様に、落ちない様にバンドエイドを張り、そのままにして一晩寝ます。

②次の日、バンドエイドを外して、綿を除き、先の丸いピンセットを二本用意して、(普段から臍の底が見えている形状の人は一本で良い)一本で臍を開き、一本で、底のヒトデ状になつた溝に附着している筋状のゴマ迄全部取り除きます。(自分ではやりにくいので、身内の人にやって貰う方が良い)

これで、産まれてから今日迄の臍のゴマは全部無くなり、後は時々風呂上がりにはティッシュで底の方を拭うだけで、核を無くしたゴマは一切増殖、成長しなくなり、炎症、化膿、痛み、恐れ、は無くなります。

こういう事が書いてあった。

この記事に準じて実行した私の、経験上の脚色が半分以上入っているかもしれません、主旨は概ねこういう内容でありました。私自身、実際に臍の形状のままのゴマが出て来た時には驚きました。

ゴマを油でふやかして、皮膚は皮膚、ゴマはゴマと、はつきりさせる事によつて剥離する事が出来るのであります。この事をしない限りは、皮膚なのかゴマなのか分からず炎症、化膿の原因が除かれぬ為に

「臍のゴマに触るな」

という、家庭医療の格言が迷信のように出来上がったのであります。

臍のゴマは「貫主本仏論」「池田、大聖人より偉い論」と同じではないかと思ひます。

法と貫主は元々別々の存在であるにもかかわらず、組織の保守と貫主の権威の為に、いつの間にか貫主と法が一緒のもの、貫首こそが法という安易な考え方と方向を求める様になつてしまつたのであります。

皮膚とゴマは元々別々の存在であるにもかかわらず、癒着して行く内に皮膚とゴマが一体になつたかの如くなり、少し触れただけで炎症、化膿を生じ、祟りが起こるかの様に「臍のゴマに触るな」となるのであります。

